

平成26年度 市内遺跡発掘調査報告書

2015

甲賀市教育委員会



## 序

滋賀県の南東部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂水斎王頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」をはじめとした歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、約 530 箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数です。また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置しており、新名神高速道路が市内を横断して両地域をつないでいます。このような立地によって今後、市のさらなる発展も期待されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれている性格上、目にする機会が少ないものです。しかし、地中に埋もれているからこそ、郷土の歴史を知るもっとも身近な歴史資料であり、先人が残した貴重な文化資産です。このような埋蔵文化財を様々な開発から保護し、さらに記録に留めることも教育行政の大きな責務です。

教育委員会では市内の様々な開発に伴い、埋蔵文化財の試掘調査・確認調査を実施しており、調査の中で地域の歴史を語る上で非常に重要な知見を得ることができました。また、水口岡山城跡では平成 24 年度から遺跡の保存を目的に遺構確認調査を開始し、本年度は本丸南側斜面の調査を実施し、本丸周囲の構造が明らかとなりました。それらの調査成果をまとめた本報告書が甲賀市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、調査に参加していただいた方々、報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々、関係機関に心より感謝申し上げます。

平成 27 年（2015 年）3 月

甲賀市教育委員会

教育長 山本 佳洋



## 例 言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成 25 年度に実施した試掘調査および水口岡山城跡第 2 次発掘調査の概要をまとめたものである。なお、本書に掲載した調査は、すべて平成 25 年度に現地調査を実施し、平成 26 年度に整理調査を実施した。
2. 本書で報告している試掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）および滋賀県文化財保存事業費補助金（県費補助金）を得た。また、水口岡山城跡第 2 次発掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）を得た。
3. 平成 25 年度および平成 26 年度の甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

調査主体 甲賀市教育委員会 教育長 山本佳洋

調査事務局 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課

課 長 縮谷 隆

課長補佐 長峰 透

大道和人（平成 25 年度）

埋蔵文化財係 係長 鈴木良章

主査 小谷徳彦（調査担当者）

主査 渡部圭一郎（調査担当者）

4. 本文の執筆分担は、次の通りである。

《試掘調査》渡部

《水口岡山城跡第 2 次調査》小谷

また、本書に掲載した図面の作成は小谷と渡部が担当し、市田まち子・北森光・平本瞳が作業にあたった。なお、編集は渡部が行った。

5. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準としている。また、水口岡山城跡第 2 次発掘調査で使用した座標は、世界測地系に準拠する。なお、本書で示す北は座標北である。
7. 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SD：溝状遺構 SK：土坑 SP：ピット、柱穴 SW：石垣、切岸 SX：性格不明、その他

8. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。



# 目 次

## 試掘調査

全体概要	1
13-01 次・13 次 水口城遺跡の調査	2
13-04 次 下浦遺跡の調査	4
13-05 次 北脇遺跡の調査	5
13-07 次 信楽町牧地先の調査	7
13-11 次・30 次 古御殿遺跡の調査	9
13-12 次・23 次 西林口遺跡の調査	12
13-15 次 水口岡山城遺跡の調査	14
13-16 次 水口町神明地先の調査	16
13-17 次 窯ヶ谷遺跡近接地の調査	18
13-18 次 今郷シゲ道遺跡・大田和遺跡の調査	19
13-27 次 前野遺跡近接地の調査	23
13-28 次 五位ノ木遺跡の調査	25

## 水口岡山城跡第2次発掘調査

第1章 調査経緯	31
第2章 調査経過	33
第3章 遺 構	37
第4章 遺 物	44
第5章 ま と め	45





平成25年度  
試掘調査



## 全体概要

甲賀市において平成25年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査は、開発事業などにかかる試掘・確認調査が31件、水口岡山城跡の保存目的遺構確認調査が1件であった。

開発事業などに伴う試掘・確認調査のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で実施した調査が11件、同近接地で実施した調査が4件、同範囲外で実施した調査が15件であった。範囲外の調査は「甲賀市みんなのまち守り育てる条例」の規程にもとづき、開発事業の実施に先立ち、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施したものである。なお、開発に伴う試掘・確認調査の件数は、平成24年度の18件より12件増加した。

表1に平成25年度中に実施した試掘・確認調査の一覧表にして示した。遺物の出土を確認した調査が11件、遺構の存在を確認した調査が7件あったが、記録保存の本発掘調査の対象となるものはなかった。本報告書では平成25年度に実施した試掘・確認調査のうち、埋蔵文化財包蔵地内で行った調査と、同近接地で行った調査のうち、遺構と遺物を確認した調査について概要を記す。また、水口岡山城跡の遺構確認調査については本書の別項にて調査概要を記す。

表1 平成25年度に実施した試掘・確認調査一覧

NO	内容	調査 次数	調査 開始日	調査 終了日	調査地			目的	遺跡 有無	遺跡 名称	結果			
					町名	大字	小字				調査面積	遺物	遺構	詳細
001	試掘	13-01	H25.6.18	H25.6.18	水口町	本丸	小学	個人住宅	あり	水口城遺跡	9.00	×	×	
002	試掘	13-02	H25.5.7	H25.5.7	甲南町	深川	川原郷	住宅	なし		40.00	×	×	
003	試掘	13-03	H25.5.21	H25.5.21	水口町	花庄		その他建物	あり	花庄遺跡	80.00	×	×	
004	試掘	13-04	H25.5.29	H25.5.29	甲南町	野田	下流	個人住宅	あり	下流遺跡	12.00	×	×	
005	試掘	13-05	H25.7.24	H25.7.26	水口町	北堀	中切	土蔵	あり	北堀遺跡	425.00	△	遺構跡	×
006	試掘	13-06	H25.6.6	H25.6.6	土山町	大野	森ノ下	個人住宅	あり	水口城遺跡	9.00	×	×	
007	試掘	13-07	H25.6.17	H25.6.17	信楽町	吹	中島	その他関係	なし		100.00	△	陶器	△ 溝1、土坑1基
008	試掘	13-08	H25.6.4	H25.6.4	信楽町	畑	中野	住宅	なし		60.00	×	×	
009	試掘	13-09	H25.6.7	H25.6.7	土山町	大野	土々谷	工場	なし		100.00	×	×	
010	試掘	13-11	H25.7.3	H25.7.8	水口町	源深		その他関係	あり	吉御殿遺跡	128.00	△	陶器、瓦	△ ゴツ、溝、土坑
011	試掘	13-12	H25.7.30	H25.8.1	水口町	西林口		宅地造成	あり	西林口遺跡	150.00	△	経路陶器、土葬器	△ ゴツ、溝、土坑
012	試掘	13-13	H25.8.8	H25.8.9	水口町	堤内		個人住宅	あり	水口城遺跡	9.00	×	×	
013	試掘	13-14	H25.8.6	H25.8.6	水口町	牛形	堀川	住宅	なし		59.00	×	×	
014	試掘	13-15	H25.8.19	H25.8.20	水口町	敷新		その他建物	あり	水口岡山城遺跡	72.00	×	×	
015	試掘	13-16	H25.9.9	H25.9.10	水口町	神原		住宅	なし		78.00	△	陶器、磁器	△ 土坑遺構
016	分布調査	13-17	H25.9.19	H25.9.20	信楽町	長野	栗ヶ谷	その他関係	近接地	栗ヶ谷遺跡		○	陶器	×
017	分布調査	13-18	H25.9.25	H25.10.8	水口町	今堀	シノ渡	その他関係	あり	水口岡山城遺跡		○	遺構跡	○ 埋蔵
018	補遺調査	M02	H25.9.11	H26.3.31	水口町	水口	吉成	地方自治体民民の業務する民衆目的事業の内部確認調査	あり	水口岡山城遺跡		○	瓦、陶器	○ 石塚、切岸
019	試掘	13-19	H25.11.11	H25.11.12	甲南町	野尻	酒蔵境内	その他建物	なし		87.00	×	×	
020	試掘	13-20	H25.11.13	H25.11.13	甲賀町	論日		その他関係	なし		90.00	×	×	
021	試掘	13-21	H25.11.28	H25.11.28	水口町	伴中山	西流	その他関係	なし		15.00	×	×	
022	試掘	13-22	H25.12.19	H25.12.18	水口町	北堀	中切	その他関係	あり		50.00	△	土葬器、溝	×
023	試掘	13-23	H25.12.29	H26.1.20	水口町	西林中		住宅	あり	西林中遺跡	22.00	×	×	
024	試掘	13-24	H26.1.15	H26.1.15	信楽町	吹		土蔵	なし		40.00	×	×	
025	試掘	13-25	H26.1.8	H26.1.8	水口町	宇川	吉原	土蔵	なし		24.00	×	×	
026	試掘	13-26	H26.2.19	H26.2.18	水口町	下山	湯山	その他関係	近接地	東郷山城遺跡	38.00	×	×	
027	試掘	13-27	H26.2.21	H26.2.21	甲南町	野原	新野	宅地造成	近接地	新野遺跡	90.00	△	瓦器、陶器	△ ゴツ、溝、土坑
028	試掘	13-28	H26.3.12	H26.3.14	信楽町	神山	石橋	その他関係	あり	瓦石ノ木遺跡	55.00	○	陶器、瓦葺	○ 竪穴、民屋
029	試掘	13-29	H26.2.10	H26.2.10	甲賀町	磯城		その他関係	なし		18.00	×	×	
030	試掘	13-30	H26.3.19	H26.3.19	水口町	源深		宅地造成	近接地	吉御殿遺跡	98.00	△	瓦	×
031	試掘	13-31	H26.3.31	H26.3.31	水口町	伴中山		その他関係	なし		50.00	×	×	

※13-10回は欠番

## 13-01 次・13 次 水口城遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

水口城は、寛永十一（1634）年、徳川家光の上洛に際して、宿館として築かれた。古絵図によると本丸の北側に堀を隔てて二之丸があり、天和二（1682）年に入封した加藤氏はこちらに藩庁を構えた。本丸の周囲には家臣団屋敷が形成されており、これらを含めた城地全体を「郭内」と呼んだ。現在、この郭内の範囲が埋蔵文化財包蔵地として登録されている。水口城遺跡の本丸部分は昭和四十七（1972）年に滋賀県の史跡に指定されているが、周辺は宅地化されており、既往の調査は全て小規模な試掘調査が大半である。13-01次は本丸の西側、約100mの地点で行った。個人住宅の建設に伴う試掘調査で、調査面積は9㎡であった。13-13次は二之丸北端部分にあたる。個人住宅の建設に伴う試掘調査で、調査面積は9㎡であった。

### 調査概要（13-01次）

基本層序は、上から①黄色砂質土（現代の盛土）、②黒色砂質土（近代以降の造成土）、③黄灰色砂質土（確認面）で、現地表面から約40cm下で③層を確認した。③層から遺物は全く出土しないため、正確な時期は不明であるが、同層は良くしまった均質な土で、屋敷地造成の際の整地層と考えられる。

### 調査概要（13-13次）

基本層序は、上から①橙色粗砂（現代の盛土）、②黒灰色粘質土（近代～現代の造成土）、③暗灰色粘質土（近世末～近代）、④明茶色砂質土（確認面）で、現地表面から70cm下で④層を確認した。④層は比較的しまりの良いやや炭を含む層で、同層において検出作業を試みたが、遺構等は検出できなかった。

### まとめ

今回調査地についても従前の調査と同様、小規模調査であり、遺構等は確認できなかったが、城の整地層と見られる土層を確認できたことは今後周辺での調査に資する大きな成果であった。



写真1 13-01次 調査区全景



写真2 13-13次 調査区全景

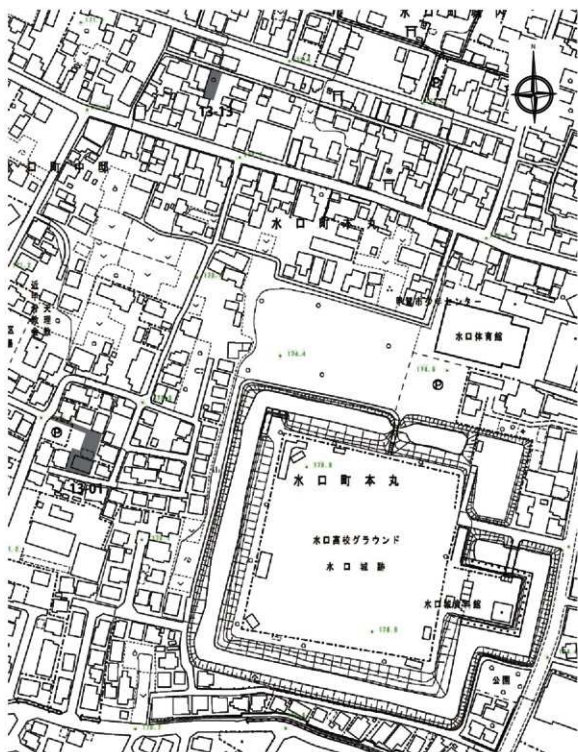


図1 試掘調査対象地位位置図 1 : 2,500

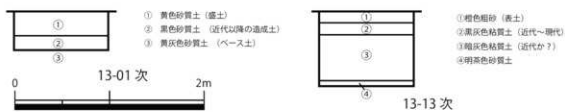


図2 土層図 1 : 40

## 13-04 次 下浦遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

下浦遺跡は、甲南町野田に所在する。遺跡は柳川の南、段丘の縁辺部に立地しており、平成17年に滋賀銀行甲南支店建設に伴う試掘調査で14世紀を中心とした遺構・遺物の存在が確認され、同年埋蔵文化財包蔵地として登録された。今回調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、調査面積は4㎡であった。



図3 調査地位図 1:6000

### 調査概要

基本層序は、上から①碎石、②黄色砂質土（現代の造成土）、③暗灰色粘質土、④茶灰色粘質土、⑤灰褐色粘質土、⑥灰色砂質土、⑦暗灰色砂礫（地山）で、現地表面から100cm下で⑤層、160cm下で⑦層を確認した。⑤層は従前の調査で検出している遺構面とほぼ同質の土であるが、今回調査地では遺構は確認できず、同層およびその上層においても遺物を全く含まないことから、遺跡の広がりとしては西側までにとどまると推測される。また、甲南庁舎敷地内の水道工事に伴う立会調査で、敷地中央から北側は遺構面が存在せず、一段下がる事が確認されており、遺跡は現集落を含む南側にかけて広がりを持つと考えられる。

### まとめ

今回調査地について遺構等は確認できなかったが、遺跡の範囲を確認する上で重要な成果が得られた。



写真3 13-04次 調査区全景

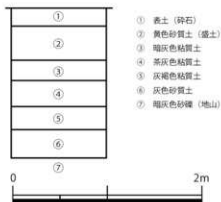


図4 土層図 1:40

## 13-05 次 北脇遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

北脇遺跡は、水口町北脇に所在する。遺跡は野洲川の北岸の2次段丘上に立地し、これまで数次の調査が行われている。平成18年の調査では掘立柱建物6棟のほか、60m以上に及ぶ長い柵、鍛冶関係遺物が検出されており、一般の集落とは少し様相を異にしている。また、平成18年の調査で「徳西庶家」の印面を持つ青銅製の印鑑が発見されており、この見方を補充する。

今回調査地は北脇遺跡の最東部に位置し、大型店舗建設に伴い試掘調査を行った。調査面積は42.5㎡であった。

### 調査概要

調査の結果、対象地の北東から南西にかけて幅30m程度の自然流路が流れることがわかった。流路内の基本層序は、上から①耕作土、②暗灰色粘質土(床土)、③青灰色粘土、ないし粗砂(堆積土)で、現地表面からおおむね100cm～150cmで③層に達する。

自然流路の両岸では床土下で黄色粘質土を確認しており、同層は従前の北脇遺跡の調査の遺構面と同質であるが、今回調査地では遺構は確認できなかった。

また、同層およびその上層でも遺物は出土しない。図示したものは全て最上層の耕作土からの表採である。杯蓋はやや丸みをもつ端部から平坦な天井をもつ。9世紀前半代の所産と考えられる。



写真6 13-05次 9トレ全景



図5 試掘調査対象地位置図 1:4,000



写真4 13-05次 1トレ全景



写真5 13-05次 2トレ全景

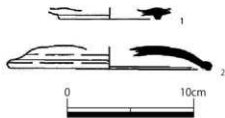


図6 出土遺物実測図 1:3

## まとめ

今回調査地については自然流路を確認したものの、遺構等は確認できなかった。今回調査地より東側でも数回試掘調査を実施しているが、遺構等は確認できていないことから、遺跡の広がりとしては今回調査地より西側でとどまると推測される。西側に今回発見した谷筋と同一方向の並びを持つ畦畔があり、集落はそこまでとどまる可能性が高い。

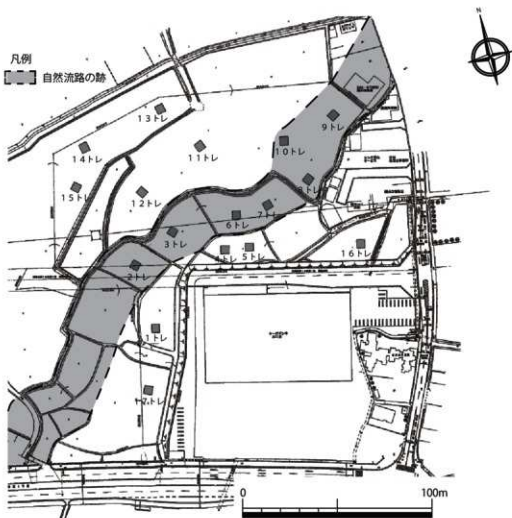


図7 調査トレンチ位置図 1:2,000

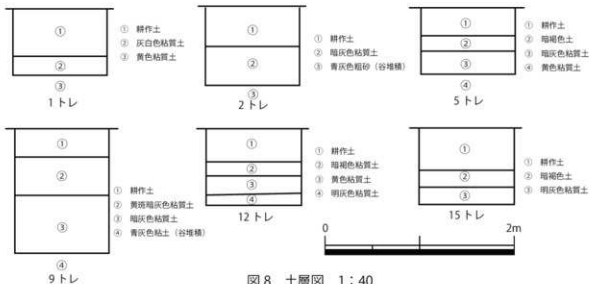


図8 土層図 1:40



## 13-07 次 信楽町牧地先の調査

### 調査位置と調査経緯

調査地は、信楽町牧の大戸川左岸に位置する。今回調査は駐車場の造成に伴う試掘調査で、調査面積は100㎡であった。

### 調査概要

基本層序は、上から①耕作土、②茶褐色粘質土、③黄白色粗砂、④灰白色粗砂で、現地表面から50cm下で④層を確認した。

③層以下は大戸川の氾濫に伴う河川堆積と考えられる。④層の灰白色粗砂で遺構検出を試み、南北方向の溝2条と溝SD02を切り込むかたちで、土抗状遺構SX03を検出した。溝SD02は幅約140cm、検出面からの深さ約10cmを測る。SX03は長さ160cm、幅50cmの長楕円形状で、検出面からの深さ約15cmを測る。いずれの遺構からも遺物は出土しなかったが、確認面である④層を一部断ち割りしたところ、18～19世紀と考えられる信楽焼溜鉢が出土していることから、これらの遺構は近世～近代にかけての所産である可能性が高い。

### まとめ

今回調査地について遺構等は確認できなかったが、比較的大型の信楽焼溜鉢片が出土しており、近世～近代の集落に伴うものの可能性が高い。おそらく現集落がほぼその位置を踏襲していると考えられる。

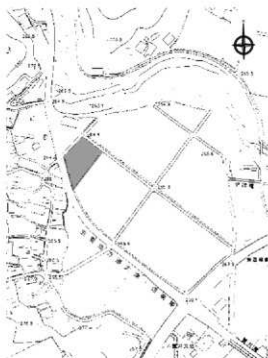


図9 試掘調査対象地位置図 1:5,000



写真7 13-07次 2トレ全景



写真8 13-07次 SD02掘削状況

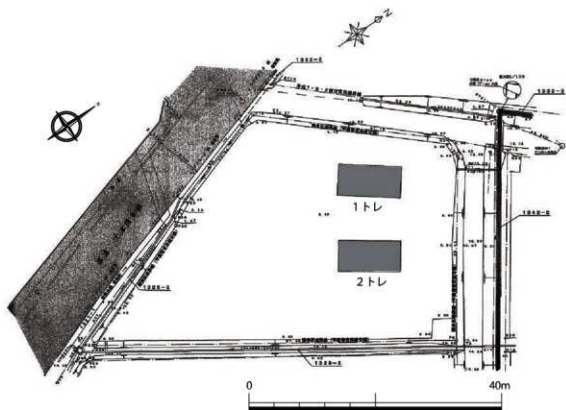
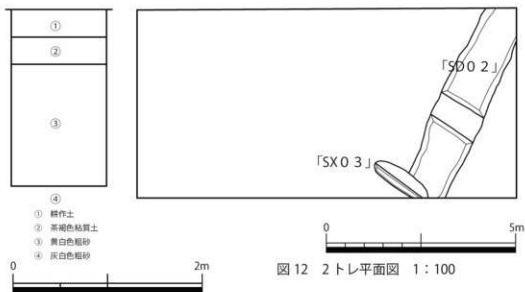


図10 調査トレンチ位置図 1:600



- ④  
 ① 耕作土  
 ② 茶褐色粘質土  
 ③ 黄白色粗砂  
 ④ 灰白色粗砂

図11 土層図 1:40

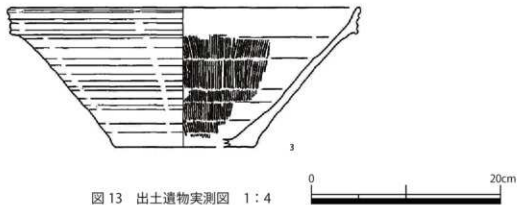


図13 出土遺物実測図 1:4

## 13-11 次・30 次 古御殿遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

古御殿は、元和六（1620）年、徳川秀忠の娘である和子が上洛・入内の折に築かれた。いわゆる「御茶屋御殿」である。「江州水口絵図」によると、周囲を水堀に囲まれ、「御殿御屋敷ノ内五拾間ニ五拾三間」とあり、「堀之広さ上口五間」とある。現在の旧甲賀病院の敷地がほぼ御殿の範囲と考えられるが、地表には全く遺構が確認できない。

13-11 次は移転後の甲賀病院の跡地利用を検討するため、敷地内の遺構の遺存状況を確認する目的で調査を行った。調査面積は128㎡であった。

13-30 次は古御殿遺跡の西隣にあたり、宅地造成工事に伴い、試掘調査を行った。調査面積は96㎡であった。

### 調査概要（13-11 次）

基本層序は、上から①碎石、②橙色粗砂、③暗褐色粘質土、④暗茶褐色粘質土、⑤黄灰色粘質土、⑥黄灰色砂礫で、現地表面から140cm下で⑤層を確認した。

敷地北側に設定した第2トレンチで溝状遺構2条、土抗1基を検出した。出土遺物は18世紀代～近代にかけてのものが大半で、これらの遺構は古御殿に関係するものではないと考えられる。ただ、重機掘削中の2次堆積土中から中心飾りに桔梗文をもつ軒平瓦（図17-6）が出土しており、これは水口岡山城跡出土の軒平瓦と同型と考えられる。敷地内の他のトレンチでは遺構面は確認できず、病院建設時のかく乱層の直下が地山の砂礫層であった。病院建設時に大半の遺構が破壊されていると考えられる。

### 調査概要（13-11 次）

基本層序は、上から①碎石、②明黄色砂礫（盛土）、③暗褐色粘質土、④明茶色粘質土で、現地表面から70cm下で④層を確認した。④層は比較的安定した面で、1トレ、2トレでピット、溝等を確認した。ただし、遺物が出土せず、時期や性格は不明である。

### まとめ

今回調査地については古御殿に関する遺構は確認できなかったが、水口岡山城跡と同型の軒平瓦が出土したことは特筆すべきことである。2次堆積土中の出土ではあるが、古御殿造営の際に水口岡山城で使われた瓦を再利用している可能性がでてきた。これは水口岡山城の廃城・取り壊し時期と古御殿の造営時期に関わる問題であり、今後の調査の進展が強く望まれる。

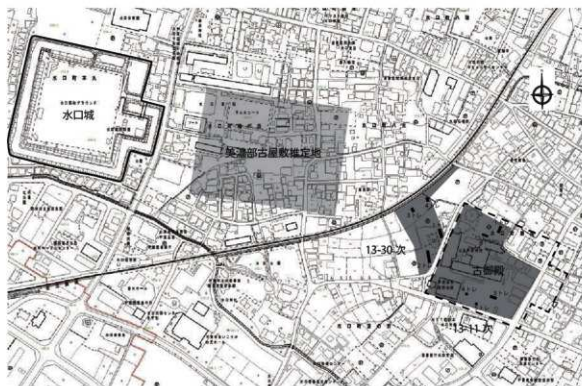


図 14 試掘調査対象地位置図 1:5,000

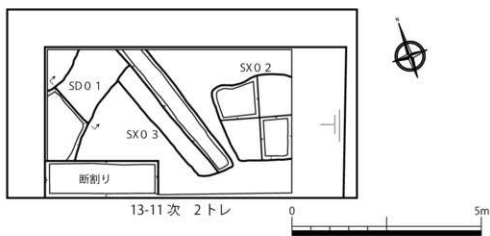


図 15 トレンチ平面図 1:100

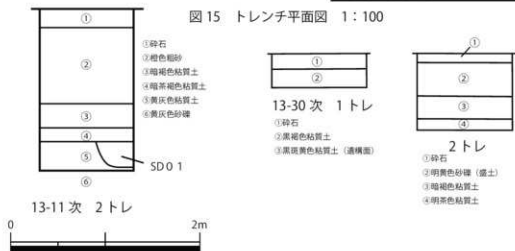


図 16 土層図 1:40

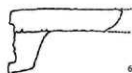


13-11 次



5

図 17 出土遺物実測図 1:4



6

13-11 次



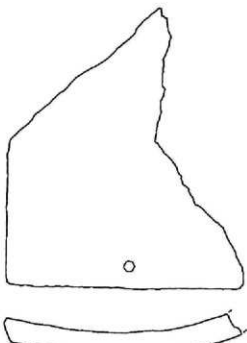
7



写真9 13-11 次 2トレ全景



写真10 13-11 次 3トレ全景



13-30 次

8



写真11 13-30 次 1トレ全景



写真12 13-30 次 2トレ全景

## 13-12次・23次 西林口遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

西林口遺跡は、水口町西林口に所在する。西側に柏木三方中惣の郷鎮守社である柏木神社がある。過去の試掘調査から10世紀～14世紀代を中心とした集落遺跡である。13-12次は宅地造成工事に伴う試掘調査で、調査面積は150㎡であった。13-23次は集合住宅建設に伴う試掘調査で、調査面積は22㎡であった。



図18 試掘調査対象地位置図 1:5,000

### 調査概要 (13-12次)

基本層序は、上から①耕作土、②黒ボク土、③黄色粘質土（遺構面）で、現地表面から50cm下で③層を確認した。同面で溝、小ピット、土抗等を検出したが、大半の遺構からは遺物が出土せず、また、近現代のかく乱を多く受けていた。4トレで検出した土抗SK0401は幅250cm四方の隅丸方形で検出面からの深さ約5cmを測る。細片ではあるが、遺構出土の遺物を図示した。9は土師皿で胎土は精良。12世紀中頃か。

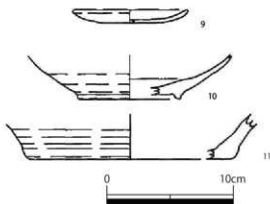


図19 出土遺物実測図 1:3

SK0303出土。10は土師質素地の緑釉陶器碗で貼り付け高台の内側に段を持つ。10世紀後半と考えられる。SP0502出土。11は信楽焼こね鉢もしくは播鉢で色調は赤褐色、焼成は良好。14世紀代と考えられる。SK0303出土。SK0303は径170cmの土抗であるが、遺構の切り合い関係から近現代以降のものと考えられることから、これらの遺物は2次堆積土中の流れ込みと考えられる。

### 調査概要 (13-23次)

基本層序は、上から①耕作土、②明茶色粘質土、③茶褐色粘質土、④灰褐色砂礫（地山）で、現地表面から80cm下で④層となる。遺構・遺物は確認できなかった。

### まとめ

今回調査地では明確に中世と考えられる遺構は確認できなかったが、比較的安定した地盤の上に多くのピットや溝が確認できた。過去の調査で遺跡の北側及び西側では遺構の検出が低調であることから、遺跡はより南東側へ広がると考えられる。

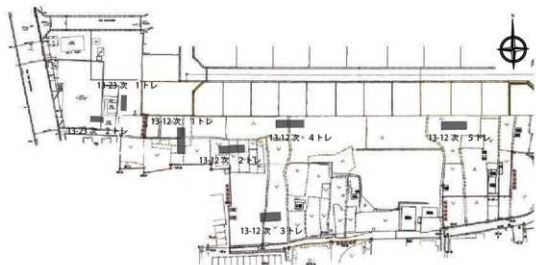


図20 調査トレンチ位置図 1:1,500

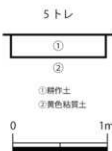
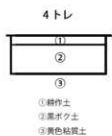


図22 土層図  
1:40

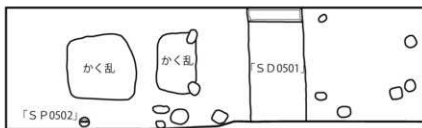
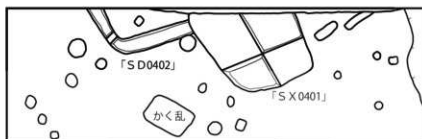


図21 平面図 1:100



写真13 13-13次 4トレ全景



写真14 SX0401

## 13-15 次 水口岡山城遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

調査地は、水口岡山城跡の南麓、国道307号線との間にあたる。老人福祉施設の建設に伴う試掘調査で、調査面積は72㎡であった。

### 調査概要

基本層序は、1トレでは上から①コンクリート、②碎石、③黄色砂礫（盛土）、④黄色粘質土、⑤黄色砂質土（地山）で、北側では現地表面から120cm下、南側では200cm下で⑤層を確認した。2～5トレでは現代の駐車場造成土の直下が地山の明黄色砂質土ないし岩盤となることから、山側に近い部分は削平されていることがわかる。307号線から南にかけて地形が一段下がっており、今回調査でその落ちを確認できた。

### まとめ

今回調査地については水口岡山城に關係する遺構・遺物は確認できなかった。古絵図によると南の大岡寺周辺が屋敷地として見えていることから、南側の一段下がった平坦面を中心に家臣団屋敷をはじめとした城下町が広がると考えられる。今後の調査成果に期待したい。

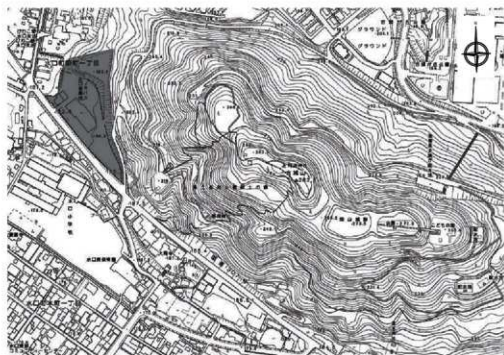


図 23 試掘調査対象地位置図 1：8,000





図 24 調査トレンチ位置図 1 : 1,500

南

北

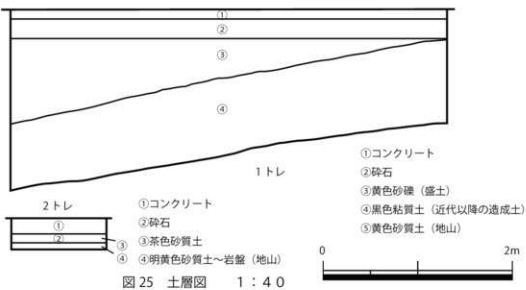


図 25 土層図 1 : 40



写真 15 1トレ土層



写真 16 2トレ土層

## 13-16次 水口町神明地先の調査

### 調査位置と調査経緯

調査地は、水口岡山城跡の南麓から南へ約300mに位置する。水口岡山城域下町である三筋の町の南側に隣接する位置にあたる。集合住宅の建設に伴う試掘調査で、調査面積は78㎡であった。

### 調査概要

基本層序は、上から①暗褐色砂質土、②明黄色砂礫（地山）で、現地表面から75cm下で②層を確認した。1トレで池状遺構SX01を確認した。SX01は長径360cm、短径120cmを測る長楕円形で、地山の砂礫層を掘り込む形で検出した。検出面からの深さ10cmを測る。径20cm前後の自然礫を用い、周囲を石組み護岸状に形作る。埋土は暗褐色土で、埋土中から信楽焼の播鉢等が出土した。13は信楽焼播鉢で、外上方に直線的にのびる体部から口縁部は外側に屈曲する。端部は丸みをおびる。播目は5条1単位、胎土は精良で、赤褐色を呈する。14は信楽焼水差・建水で、筒状の胴部をもち、口縁部は方形におさめる。端部がやや受け口状に凹む。胎土は精良で、外面は泥しように塗布し、茶褐色を呈する。いずれも16世紀後葉～末葉と考えられる。

### まとめ

今回調査地は古絵図によると水口岡山城の城下町にあたるが、絵図には明確に建物などは描かれていない。今回調査で検出した池状遺構がどのような性格をもつかは周辺の調査の進展をまって判断したい。



図26 試掘調査対象地位置図 1:15,000

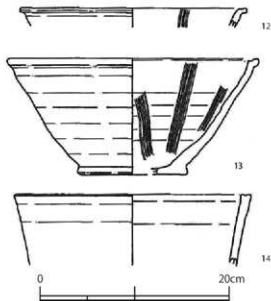


図27 出土遺物実測図 1:4

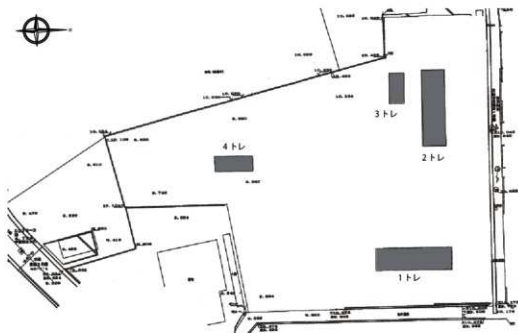


図28 調査トレンチ位置図 1:500

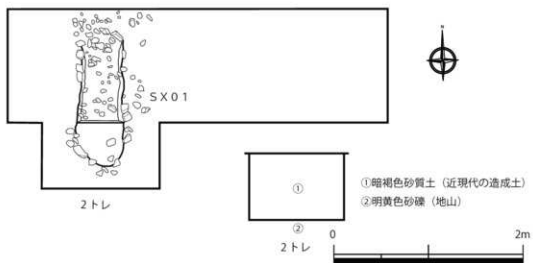


図29 調査トレンチ平面図 1:100

図30 土層図 1:40



写真17 2トレ全景



写真18 SX01 掘削状況

## 13-17次 窯ヶ谷遺跡近接地の調査

### 調査位置と調査経緯

調査地は、信楽町長野に所在する。大規模太陽光発電施設建設計画が持ち上がった際、近辺に信楽焼窯跡である窯ヶ谷遺跡が所在することから、範囲確認のため分布調査を行った。

### 調査概要

分布調査の結果、開発区域の外側で窯跡1基を確認した。現状で開口部幅100cm、焼成室最大幅120cm、奥行き600cmを測る。前面の燃烧室天井部が崩落していると考えられ、分焰柱の有無は不明である。窯跡下方にかけて灰原が広がっており、以下に表採資料を図示する。17は片口付きこね鉢。胎土は精良で、色調は暗赤褐色を呈する。14世紀後半と考えられる。

### まとめ

今回新たな窯跡は確認できなかったが、遺跡の範囲を確認する上で重要な成果が得られた。

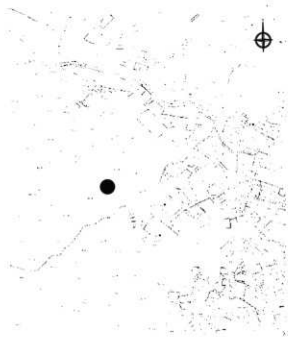


図31 調査地位図 1:10,000

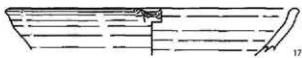


図32 出土遺物実測図 1:4



写真19 窯体遺景（手前が灰原）



写真20 窯体入り口部



写真21 窯体内部

## 13-18 次 今郷シゲ道遺跡・大田和遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

今郷シゲ道遺跡・大田和遺跡は水口町今郷に所在する。遺跡は野洲川右岸の日野町と隣接する丘陵の南側縁部に広がる須恵器窯で、近辺には末田窯（土山町大野）がある。丘陵はここより北方へと広がり、日野町側に下久保窯跡・別所窯跡・徳谷窯跡がみられる。これらの窯跡はこれまで本格的な発掘調査は実施されておらず、地表面採集により9世紀代の須恵器がみつかることが知られていた。

今回の調査はこれらの遺跡を含む丘陵地で大規模太陽光発電施設の建設に伴い、実施したものである。調査は分布調査により、遺跡の広がりを確認することを主目的に行い、一部トレンチ調査を行った。

なお、今回の調査により保護対象とすべき範囲を確定し、その後の協議によって保護範囲を計画対象地から外すことで開発事業者側と合意し、遺跡は現況保存されている。

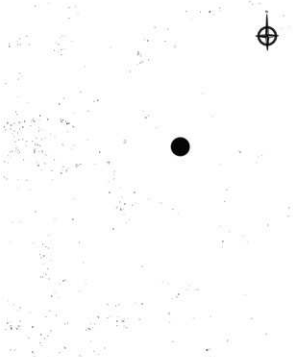


図 33 分布調査対象地位置図 1 : 100,000

### 調査概要

調査は対象範囲が約 15 万㎡と広大であるため、それぞれを A～I 地点に区切り、分布調査を行った。A 地点、B 地点、H 地点、I 地点以外からは遺物は出土しなかった。以下に各地区の概要を記す。

#### (A 地点)

遺物が比較的集中して採集できる場所である。調査地周辺はオフロードバイク場となっており、その際につくられた道が丘陵南辺に沿って走っており、道を中心とした範囲に遺物が散布する。遺物が採集できる東限の平坦面で 1m×3m のトレンチ調査を実施したが、表土を除去するとすぐに地山の黄色砂質土が露出し、焼土や灰原の痕跡は一切認められなかったことから、現在周辺で広範囲に採集できる遺物は全て道を造成した際に敷き伸ばされた土に混入したものと判断できる。

#### (B 地点)

オフロードバイク場へと通じる道の山側の崖面に焼土層が露出する箇所（写真 23）があり、窯体（2号窯）があったことがわかる。現状で確認できる焼土層の範囲は長さ 2.5m、高さ 1m をはかる。窯体および灰原の大部分は道を造成する際に破壊されていると考えられる。

#### (H 地点)

日野町へと通じる道沿いの丘陵南辺部を中心として設定した。丘陵先端部の崖面に焼土層が露出する箇所（1号窯）があり、その周辺から遺物が集中的に出土する。現状で確認できる焼土層の範囲は長さ 9m、高さ 1.8m をはかる。窯体があったと考えられる範囲の丘陵斜面を地表面観察すると、現状の崖面から 4m ほど丘陵側で径 25cm 程度の窪みが 6 箇所確認でき、煙道と考えられる。このことから複数回の作業を行っていたことが想定できる。

#### (I 地点)

遺物が比較的多く採集できる地点で、現状では焼土や灰原の痕跡は確認できない。かつては丘陵先端部に窯跡が存在したと推測されるが、田んぼ造成時に破壊されたものと考えられる。

#### (出土遺物)

今回調査は、分布調査のみで発掘調査は行っていないが、コンテナ 5 箱分の遺物が採集できた。いずれも 1号窯ないし 2号窯の灰原からの出土である。時期はいずれも 9 世紀前半代におさまると考えられる。以下に概要を記す。

#### 杯 A (29・30)

口径 12cm 前後、高さ 4cm 前後で、法量の広がりは見られない。底部から斜め上方に立ち上がり、口縁端部はやや丸みをもつ。

#### 杯 B 蓋 (18~24)

傘型のもの (21) と平坦なもの二種がみられる。口径は 13~14cm 台のものと 16~18cm 台の二種に大きく分かれる。つまみはやや扁平な宝珠型が付く。

#### 杯 B (31~36)

口径 14cm 台のものと 18cm 台の二種に大きく分かれ、蓋の法量とほぼ対応する。体部は直線的に立ち上がるもの (34・36) と、口縁部付近でやや内湾するもの (31~33、35・36) がみられる。

#### 皿 A (25~28)

口径 14~16cm のものが出土している。体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は外側につまみ出され、端部上面はやや凹む。

#### 甕 (37)

口縁部のみ的小片であるが、口径 32cm 前後に復原できる。口縁端部は平坦で、やや外側につまみ出される。2号窯出土。

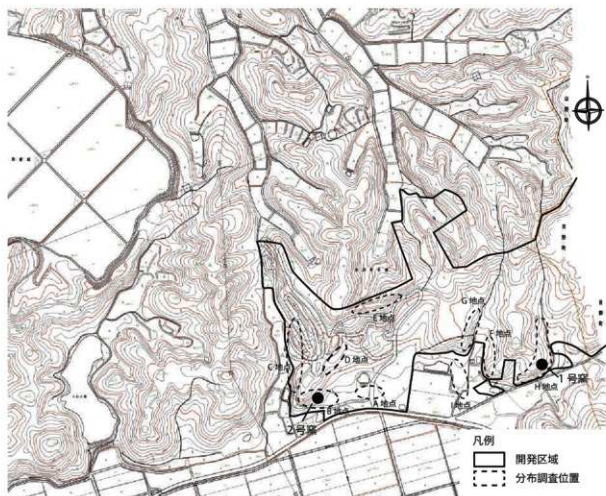


写真 22 1号窟全景



写真 23 2号窟全景



写真 24 H地点遺物散布状況



写真 25 A地点遺物散布状況

## まとめ

今回調査では以前から存在が知られていた窯跡以外の箇所でも新たな窯跡を見つけることはできなかったが、煙道の存在を確認するなど、重要な情報を得ることができた。窯跡は丘陵の先端部に主に分布し、丘陵の奥まったところには存在しない。製品は杯・皿が主体であるが、甕も少量ではあるが生産していたことが今回明らかとなった。

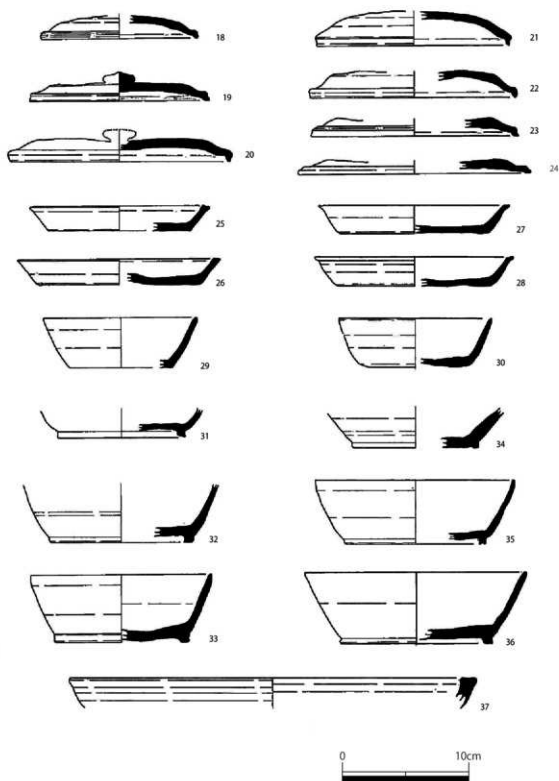


図 35 出土遺物実測図 1:3



## 13-27 次 前野遺跡近接地の調査

### 調査位置と調査経緯

調査地は、甲南町杉谷の袖川西岸の河岸段丘上に位置する。宅地造成に伴う試掘調査で、調査面積は90㎡であった。

### 調査概要

基本層序は、1トレでは上から①表土、②暗灰色砂質土、③茶褐色砂質土、④茶灰色粗砂、⑤黄色砂質土（遺構面）で、現地表面から75cm下で⑤層を確認した。1トレで小ピット、土坑を検出した。

SK05は径110cm、検出面からの深さ40cmを測る。埋土は灰色粗砂の単一層。SX06は1トレ東北隅で検出した土坑で、北側は後世のかく乱を受け、東側はトレンチ外のため全体の大きさは不明であるが、長径200cm、短径140cm程度の隅丸方形になると考えられる。検出面からの深さ28cmを測る。埋土は茶褐色粗砂の単一層で、同層からは須恵器(39)が出土している。38は瓦器椀底部。高台は断面三角形を呈し、やや外側にふんばる。見込み部にらせん状暗文をほどこす。1トレ精査出土。39は須恵器皿Aで体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は断面方形を呈する。9世紀前半と考えられる。SX06出土。

### まとめ

今回調査地では明確に中世と考えられる遺構は確認できなかったが、比較的安定した地盤の上に多くのピットや溝が確認できた。過去の調査で遺跡の北側及び西側では遺構の検出が低調であることから、遺跡はより南東側へ広がると考えられる。



図36 試掘調査対象地位置図 1:10,000

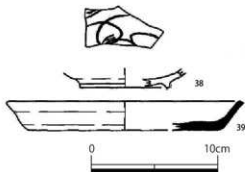


図37 出土遺物実測図 1:3



写真26 1トレ遺構検出状況

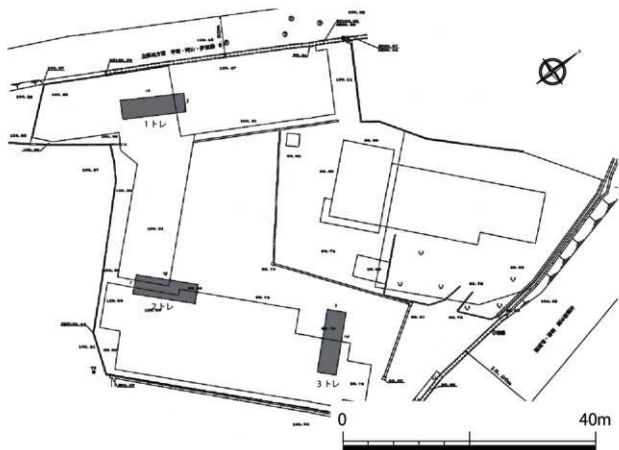


図 38 調査トレンチ位置図 1 : 600

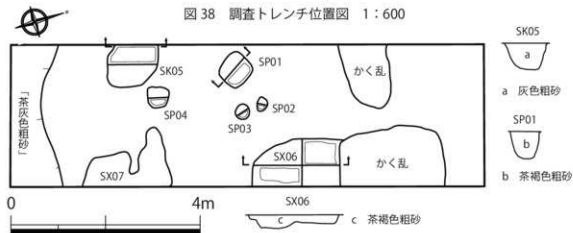


図 39 1トレ平面図 1 : 80



写真 27 SK05 断割土層

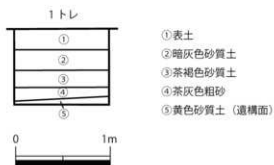


図 40 土層図 1 : 40

## 13-28 次 五位ノ木遺跡の調査

### 調査位置と調査経緯

五位ノ木遺跡は信楽町神山の三重県境と隣接する低山地の南裾部に広がる信楽焼窯跡で、これまで本格的な発掘調査は実施されておらず、14～15世紀代の遺物が採集できることが知られていた。

今回の調査はこれらの遺跡を含む丘陵地で大規模太陽光発電施設の建設に伴い、実施したものである。なお、今回の調査により保護対象とすべき範囲を確定し、盛土工法により遺跡は現況保存されている。



図41 試掘調査対象地位置図 1:25,000

### 調査概要

調査は工事対象地全体を対象に分布調査をおこない、灰原を中心とした遺物の採集できる範囲についてトレンチ調査をおこなった。

調査地北西部の山側の崖面に焼土層が露出する箇所があり、なだらかな斜面部を利用して窯が築かれていたことがわかる。これは従来五位ノ木一号窯と呼称されていたものである。そこより南東側には焼土層および黒色灰層の互層からなる灰原が広がる。南側は地形が一段下がり、湿地状堆積が広がる。湿地状堆積は検出面からの深さ約80cmを測る。それ以外の場所では窯跡や遺物等を発見することはできなかった。

#### (出土遺物)

今回調査では、コンテナ4箱分の遺物が出土した。いずれも各トレンチの灰原からの出土である。以下に概要を記す。

#### こね鉢・播鉢 (40～50)

口径26～30cm前後、口縁端部は丸みをおびるもの(40・42)とやや外側につまみ出されるもの(41・43)がある。15世紀前半頃と考えられる。48は播鉢。破片資料のため、全体が明らかでないが、口縁部は現状で3条分確認できる。15世紀後半頃と考えられる。

#### 甕 (51～56)

いわゆるN字状口縁甕で、より古い特徴をもつもの(51・53・54・56)とN字状口縁の縁帯部が萎縮し下端部が頸部につくもの(52・55)の二種がみられる。前者は14世紀前半～中頃、後者は15世紀前半頃の製品と考えられる。

#### 壺 (57～59)

おおむね口径15～20cmにおさまる。体部からやや直線的に立ち上がるもの(57)、体部からくの字に屈曲し、外反するもの(58)、上部が大きく開く広口壺(59)がある。14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。

## まとめ

今回調査では以前から存在が知られていた窯跡以外の箇所でも新たな窯跡を見つけることはできなかったが、重要な情報を得ることができた。五位ノ木遺跡は従来15世紀前半頃を中心とした操業とされていたが、今回調査では確実に14世紀代にさかのぼる資料も一定量発見された。出土量的にはこね鉢・播鉢は15世紀前半代を中心とするが、甕は14世紀前半～中頃を中心とする。今回調査は範囲確認のみで本格的な発掘調査は実施していないため、詳細の検討については今後の課題であるが、当初甕類の生産からスタートし、その後こね鉢・播鉢の生産に移っていったと想定することもできよう。

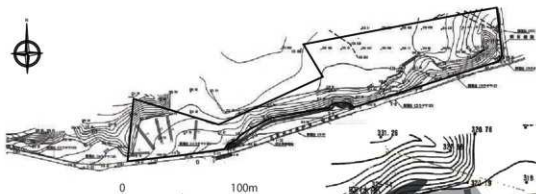


図42 調査トレンチ位置図

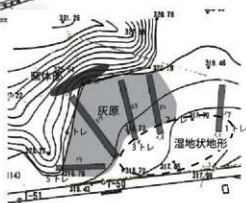


図43 調査トレンチ拡大図

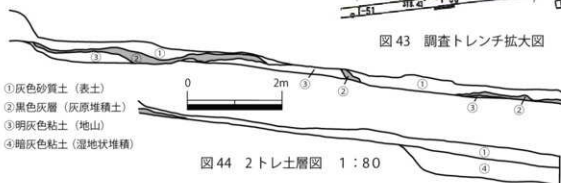


図44 2トレンチ層図 1:80

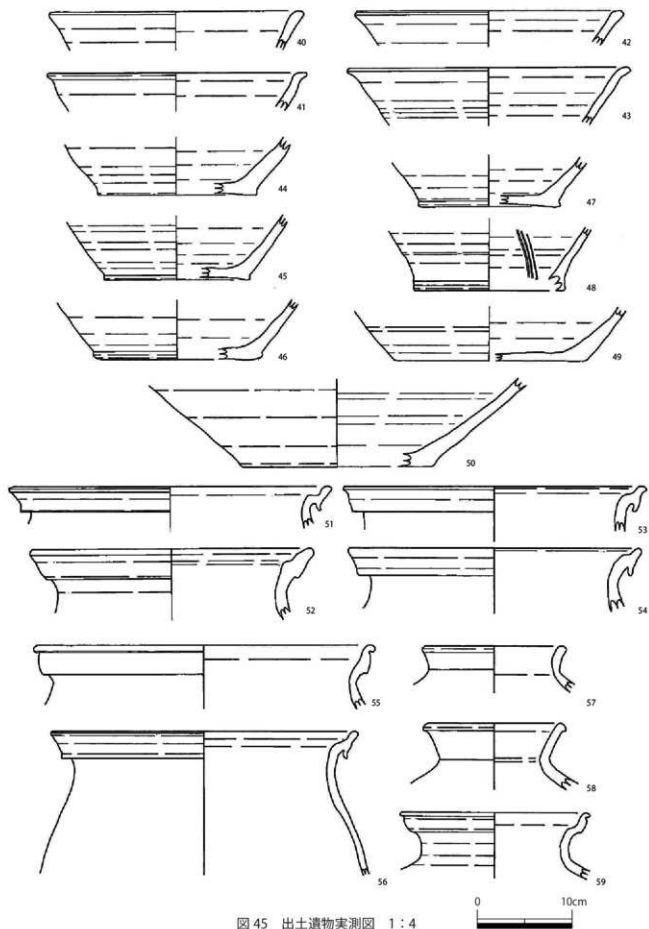


图 45 出土遗物实测图 1:4



写真 28 調査地全景



写真 29 崖面にみえる窯体部



写真 30 2トレ全景



写真 31 2トレ灰原検出状況



写真 32 3トレ全景



写真 33 3トレ土層



写真 34 4トレ全景



写真 35 4トレ灰原検出状況

水口岡山城跡  
第2次発掘調査





## 第1章 調査経緯

### 第1節 調査目的

水口岡山城跡は、甲賀市水口町に所在する古城山に立地する。南山麓には東海道が通り、野洲川にも近く、水陸の交通の要衝に位置する。

天正13年（1585）、羽柴秀吉は在地勢力であった甲賀衆を改易処分とし、家臣の中村一氏を岸和田から水口へ移して築城を命じた。また、中村一氏は秀吉の甥である秀次の付家老に任命され、秀次による近江支配の一翼を担った。当時、近江は天下統一を目指す秀吉にとって東国制覇の足掛かりとして重要な位置を占めていた。水口岡山城もその一つであり、まさに豊臣政権の拠点城郭のひとつであった。

そのような歴史的にも重要な城跡を甲賀市のランドマークとすべく、甲賀市教育委員会では城跡の様相を把握するため、平成22年度より詳細地形測量調査を実施し、平成24年度から遺構確認発掘調査を開始した。これまで城跡については十分な調査が行われてこなかったが、本調査事業を通じて、城跡の全容を把握し、国史跡に指定されることを目指す方針である。

平成25年度に実施した第2次調査は、城の主郭部である曲輪1の南側斜面を対象とし、推定大手道に隣接する箇所調査区を設定した。調査の目的は、曲輪1南側斜面の構造確認である。

### 第2節 調査体制

水口岡山城跡の調査は、甲賀市水口岡山城跡調査委員会を設置し、調査手法や調査内容について指導、助言を仰ぎながら進めている。また、オブザーバーとして文化庁文化財部記念物課と滋賀県教育委員会事務局文化財保護課から指導、助言を受けている。

第3回委員会は平成25年10月23日に開催し、水口岡山城跡の事業計画および第2次発掘調査の実施箇所について検討した。

平成26年2月18日に開催した第4回委員会で第2次発掘調査の成果について検討した。調査成果は、平成26年3月5日に報道機関への記者発表を行い、平成26年3月9日に現地説明会を実施した。現地説明会には210名が参加した。

なお、平成25年度の調査体制は以下の通り。

#### 【甲賀市水口岡山城跡調査委員会】

- |      |      |                       |
|------|------|-----------------------|
| 委員長  | 杉原和雄 | 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長 |
| 副委員長 | 中井 均 | 滋賀県立大学人間文化学部教授        |
| 委員   | 松尾信裕 | 大阪城天守閣館長              |
| 委員   | 三浦正幸 | 広島大学大学院文学研究科教授        |

委員 高木叙子 滋賀県立安土城考古博物館学芸課主任

委員 山村亜希 愛知県立大学日本文化学部准教授

【オブザーバー】 文化庁文化財部記念物課

滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課

【調査主体】 甲賀市教育委員会 教育長 山本佳洋

【調査事務局】 甲賀市教育委員会事務局

教育部長 安田正治

次 長 今村日出弥

歴史文化財課 課長 縮谷 隆

課長補佐 長峰 透

課長補佐 大道和人

埋蔵文化財係 係長 鈴木良章

主査 小谷徳彦（調査担当）

主査 渡部圭一郎

【発掘調査参加者】

《甲賀市臨時職員》

市田まち子 岸本香歩 北森光 寺田昌裕 中嶋亜季 西尾均 橋本莉代子 平井正義

藤本安弘 増田有紀

《シルバー人材センター派遣》

大原和久 小川悦男 川合泰雄 田代一由 西川武次 伏見義勝 細田昭一 村田惣一

また、調査中には下記の方にご助言やご指導をいただいた。ここに記して感謝いたします。  
小西省吾 下高大輔 高田徹 林昭男（50音順、敬称略）

## 第2章 調査経過

### 第1節 調査区の位置と規模

城の主郭部である曲輪Ⅰの東西両端には現況地形で高さ0.5mほどの土壇状の高まりがあり、古絵図によれば、その東側を天守跡(図1のa)としている。

第2次調査は天守推定地aの南側斜面を対象とし、曲輪Ⅰから約17m下に位置する食い違い虎口(図1のg)のある帯曲輪面までの斜面に調査区を設定した。ただし、曲輪Ⅰの上面近くには現在、散策道が通り、多くの市民が日々利用しているため、調査区は散策道に影響がないように曲輪Ⅰ上面から少し下がった位置を上端とした。調査区の規模は幅5m×長さ21m、面積105㎡である。

当該箇所に調査区を設定した目的は、天守推定地南側斜面の状況を確認するためである。当該部分の斜面には現況の地表面に石垣の裏込石と考えられる栗石が数多く散乱しており、石垣の存在が推定されてきた。しかし、地表面観察では石垣の存在を確認できていなかった。平成24年度の第1次調査で虎口fと曲輪Ⅱにおいて破城によって崩された石垣を確認したことから、当該箇所においても破城によって石垣が埋没していると想定した。また、調査前の地表面観察によって曲輪Ⅰと虎口gのある帯曲輪との間に平坦面が存在することを確認したため、この平坦面の様相を把握することも併せて調査の目的とした。

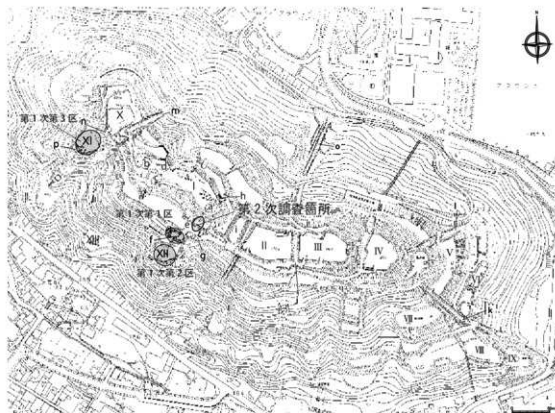


図1 第2次調査実施箇所 1:5,000  
高田徳氏が作成した縮張り図(『甲賀市史』第7巻に掲載)に調査箇所および曲輪名を加筆

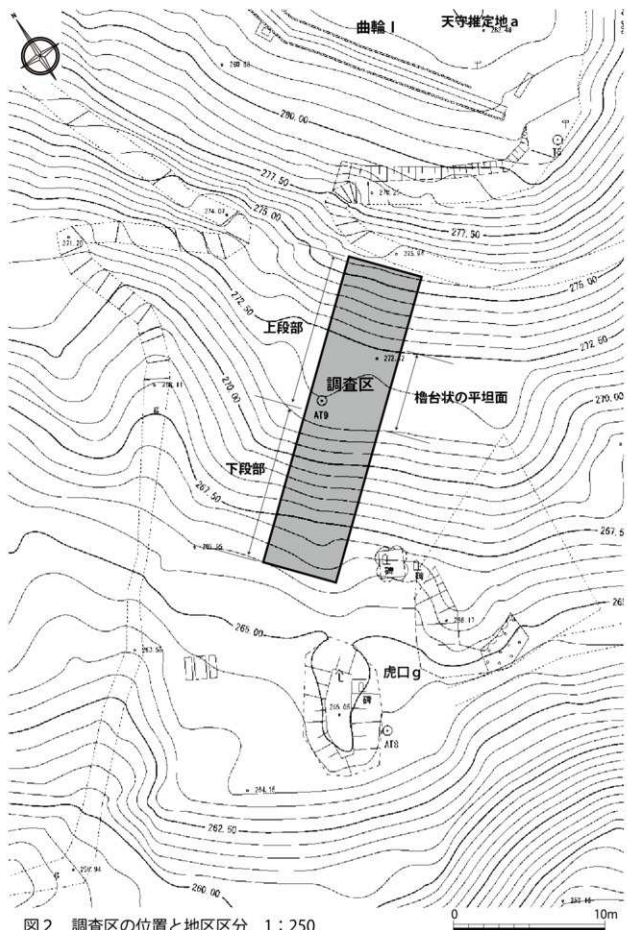


図2 調査区の位置と地区区分 1 : 250

## 第2節 調査日誌

発掘調査は、平成25年9月11日に開始し、平成26年3月27日に完了した。

以下、調査の経過について、調査日誌の内容をもとにまとめる。

[9月]	下段部 表土掘削 裾部に崩落石の堆積確認
11日 調査対象範囲の下草刈り	17日 上段部西サブトレ 築石らしき石を確認 上段斜面部 上層の栗石堆積が昭和の公園整備に伴う破壊であると判明
[10月]	下段斜面部 暗褐色粘質土掘削（～24日）
22日 調査対象範囲の下草刈り・樹木伐採・伐採樹木の除去作業（～11月19日）	20日 上段斜面裾部 崩落石多数確認 大量の栗石の間に築石らしき石を確認
28日 調査機材の搬入	下段部西サブトレ 石垣裏込を確認
29日 休憩用テントの設置	24日 年末年始の休業準備
[11月]	[1月]
18日 トレンチ設定 地形観察の結果、曲輪Ⅰ（主郭部）の一段下に平坦面（檜台状）を確認	9日 現場復旧・テント設置 上段部 写真撮影（崩落石垣・平坦面） 下段斜面裾部 暗褐色粘質土掘削（～15日）
19日 仮設階段設置（～20日） 調査前状況ビデオ撮影	15日 下段裾部 崩落石検出状況写真撮影
20日 文教常任委員会視察 あいコムこうかによる映像撮影 仮PMの設定	16日 上段部西半 上層の崩落石除去（～17日） あいコムこうかによる映像撮影
[12月]	17日 上段平坦面 精査 下段裾部西半 上層の崩落石除去（～20日） 下段部東サブトレ 岩盤検出 下段上半部は石垣がなく切岸と判明
2日 表土掘削（～12日） 東西にサブトレンチ設定	20日 降雪のため雪かき 下段裾部 築石を検出 築石前面にて岩盤露出
4日 平坦面の北端部（曲輪Ⅰへ立ち上がる斜面の裾部）に多くの崩落石と瓦を確認 上段部東サブトレ掘削	21日 上段部 築石崩落検出状況ほか写真撮影 上層平面図用地区割り作業 下段部東サブトレ 掘削
9日 トレンチ周辺の詳細地形調査（縮張り調査）	27日 上段部 上層平面実測（～2月3日） 下段下半部 黄灰褐色粘質土掘削
11日 上段平坦面表土および暗褐色粘質土掘削 上段部東サブトレ 斜面裾で大きめの石が集 中状況を確認	28日 下段部 築石周辺精査 滋賀県教育委員会文化財保護課 木戸氏来訪 調査状況を説明、指導を受ける
12日 上段斜面部 暗褐色粘質土掘削 散策道直下に栗石の集中を確認	
16日 上段部 暗褐色粘質土掘削（～24日） 平坦面 東サブトレ 掘削	

- 29日 下段部 築石検出状況写真撮影  
 みなくち子どもの森 小西氏来訪 石材検討  
 築石：花崗岩・チャート・董青石ホルンフェ  
 ルスの3種類  
 裏込石：花崗岩・緑色岩・董青石ホルンフェ  
 ルス・泥岩もしくは粘板岩の4種類

〔2月〕

- 3日 上段斜面部 暗褐色粘質土掘削（～4日）  
 上段部 上層平面図レベル測定  
 下段部 平面実測用地区割り作業
- 6日 上段部 崩落石除去
- 7日 上段部 崩落石垣検出状況写真撮影
- 12日 下段部 平面実測（～2月6日）
- 17日 降雪のため雪かき
- 18日 第4回甲賀市水口岡山城跡調査委員会  
 上段部 下層平面図実測用地区割り
- 21日 高田徹氏来訪 調査成果について意見伺う



写真1 上段部 上層崩落石検出作業



写真2 上段部 下層崩落石検出作業

〔3月〕

- 3日 記者発表準備
- 4日 調査成果の記者発表  
 現地説明会に向けた準備開始（～7日）
- 6日 上段部 下層平面実測（～19日）
- 9日 現地説明会開催。  
 日差しはあったものの、寒の戻りで冷たい風が  
 吹く中、市内外から210名参加。
- 19日 上段部 下層平面レベル測定（～25日）  
 土層断面図実測（～27日）
- 26日 現場機材洗浄・整備
- 27日 サブトレ 埋め戻し  
 発掘成果の一部公開準備作業  
 (遺構養生シート設置)



写真3 下段部 遺構検出作業



写真4 上段部 崩落石垣実測作業

### 第3章 遺構

調査区は斜面に対して直交するように設定し、中間の檜台状の平坦面を境に上段部と下段部に地区を分けて調査を実施した(図2)。調査区を設定した斜面のすぐ下には食い違い虎口(虎口g)があり、曲輪Iの裾をめぐる帯曲輪での東西方向の移動を遮断している。

また、調査区の西側には通路(図1のe)があり、大手道の一部と推定されている。調査区を設定した箇所にある平坦面は、大手道を防御するために置かれた曲輪と考えられ、大手道を挟んだ西側にも同様の平坦面がみられることから、両者は檜台としての機能をもっていたと推定できる。

以下、調査結果について記す。

#### 第1節 基本層序

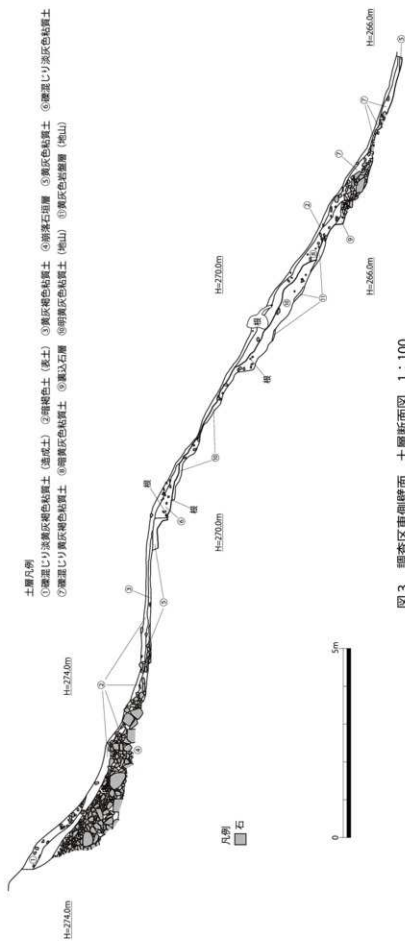
上段部と下段部で堆積状況が異なるため、それぞれの基本層序を示す。

**上段部** 上から①礫混じり淡黄灰褐色粘質土(昭和の公園整備の際の散策道造成土、プラスチック・ビニール含む)、②暗褐色土(腐葉土、表土)、③黄灰褐色粘質土(曲輪SX020104の上層に堆積、木の根などによって攪乱された層)、④崩落石垣層(上層ほど栗石が多い、上段石垣SW020101の破城による堆積層)、⑤黄灰色粘質土(岩盤由来の泥岩を含む、曲輪造成土)である。

平坦部(曲輪SX020104)については、②層と③層の堆積はそれぞれ5cm程度とごく薄く、曲輪SX020104の上面である⑤層がすぐに確認できる。しかし、斜面部分については、上半部では上段にある散策道を敷設した際に堆積した①層と表土である②層が40cm前後堆積するのに対して、下半部では②層の堆積が10~20cmで、その直下で破城によって堆積した崩落石が検出できる。崩落石の堆積は、もっとも薄い斜面の裾部分でおよそ30cm、斜面上半部では1m以上に達し、曲輪SX020104の上面である⑤層を確認することはできなかった。

**下段部** 上から②暗褐色土(腐葉土、表土)、⑥礫混じり淡灰色粘質土(斜面上端部のみ、曲輪SX020104 端部の造成土)、⑦礫混じり黄灰褐色粘質土(斜面下端部のみ、下段石垣SW020102の破城による堆積層)、⑧暗黄灰色粘質土(斜面下半部のみ、下段石垣SW020102 上部の切岸SW020103 造成土、裏込石を覆うように堆積)、⑨裏込石層(下段石垣SW020102の裏込層)、⑩明黄灰色粘質土(地山、主に切岸SW020103 面となる)、⑪黄灰色岩盤層(泥岩の岩盤層、地山)である。

上半部では表土である②層の直下で地山である⑩層が確認でき、⑩層上面が切岸SW020103であったと考えられる。一方、下半部では②層の下に⑧層が確認できる。⑧層は下段斜面の下半部のみが存在し、石垣SW020102の裏込石(⑨層)を覆うように堆積している。この堆積状況から考えて、⑧層は石垣SW020102を構築後、切岸SW020103を造成するために地山の⑩層の上に張り付けられるように堆積した土層であると推定できる。





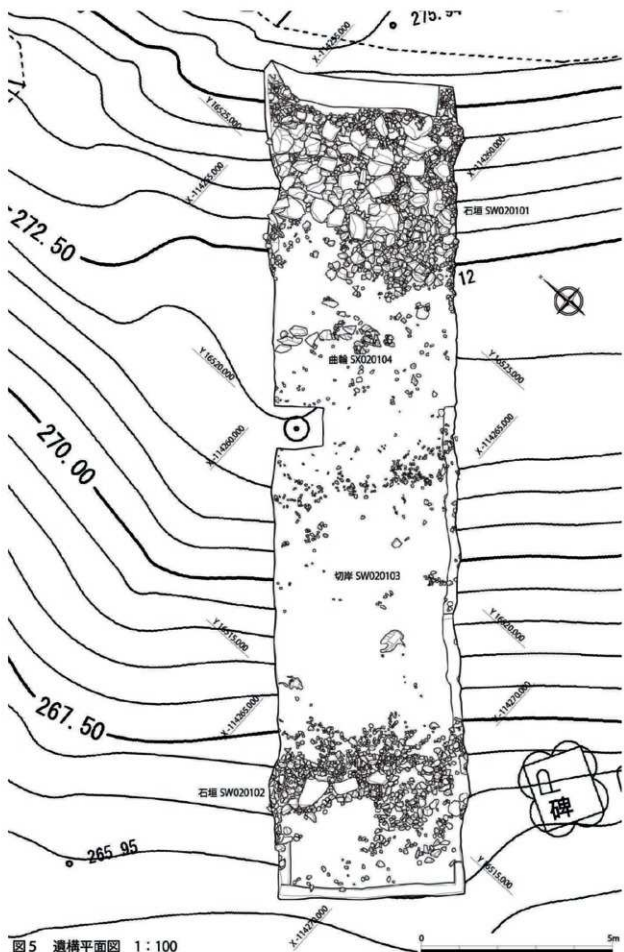


図5 遺構平面図 1:100

## 第2節 検出遺構

石垣 SW020101 調査区の上段部で検出した石垣。検出した石垣は、石垣の築石および裏込石が崩落して堆積した状況であった。そのため、すべての石が原位置をとどめておらず、曲輪 SX020104の上面に散乱した状態で石垣の基底部を確認することはできなかった。おそらく、本来の石垣は調査区よりもさらに斜面の奥側に存在するものと推測される。

崩落した石の堆積状況は、築石と考えられる大型の石の上層に裏込石と考えられる拳大の石が厚く堆積し、大きな石を完全に覆い隠している状況であった。上層に裏込石、下層に築石が堆積する状況は、破城の状況を示していると考えられる。破城によって崩された石垣は、築石が最初に崩落し、その後に裏込石が崩落すると考えられるためである。

検出した石垣の築石の大きさは約80cm～100cmで、中には100cmを超えるものもあった。築石の石材は、花崗岩と堇青石ホルンフェルスの2種類であった。また、裏込石には築石と同じ石材のほか、泥岩、粘板岩、緑色岩なども使われていた。

崩落した石が散乱していた曲輪 SX020104の上面と、主郭部である曲輪Ⅰ(図1)上面の高差は8～9mほどある。石垣の基底部を確認することはできなかったが、崩落した築石や裏込石の状況から考えて、石垣は曲輪 SX020104 上面から曲輪Ⅰ上面まで立ち上がっていたとみられ、本来は約8m～9mの高石垣だったと推測できる。



写真5 石垣 SW020101 崩落状況 (上層)



写真6 石垣 SW020101 崩落状況 (下層)



写真7 石垣 SW020102 崩落状況



写真8 石垣 SW020102 検出状況

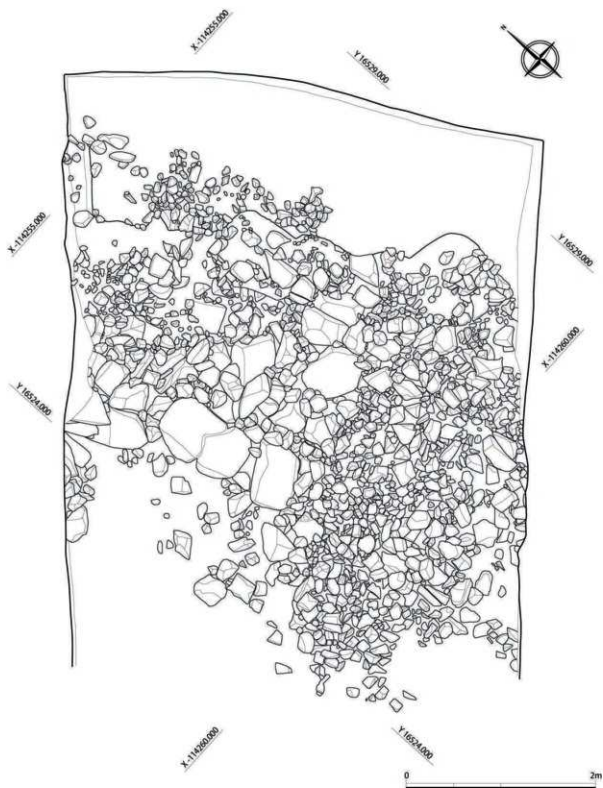


図6 石垣 SW020101 崩落状況 1:40  
 右半分：上層の崩落した裏込石の出土状況 左半分：裏込石を除去した状況

石垣 SW020102 調査区の下段部で発見した石垣。石垣 SW020101 と同様に、石垣は崩れた状態で確認した。ただし、崩落した裏込石と考えられる拳大の石を除去していくと、3つの築石が出土した。また、検出した築石の東側は、石を抜き取ったような窪み状となっていた。検出した3つの築石は面がやや揃っていないが、築石の下に根石とみられるやや大きめの石が確認できることから、この3つの築石はほぼ原位置をとどめているものと推定できる。検出した築石が石垣の基底部であると言える。根石は岩盤の上面に直接置かれた状態であった。築石の大きさは 80 cm～100 cm。築石の石材はすべて花崗岩であった。なお、遺構の方位は北に対して東に約 30° 振る。

また、検出した裏込石は、その堆積状況から考えて、上層部分は破城によって崩落したものと考えられるが、築石より奥側に入る部分については原位置をとどめているものと推測される。なお、裏込石の検出範囲は、斜面裾部のみでそれよりも上方では石を確認することはできなかった。それは石垣の基底部からおよそ 1.5mの高さまでの範囲である。この検出状況から考えて、石垣 SW020102 は、食い違い虎口（図1のg）のある帯曲輪面から2mほどの高さまでしかない腰巻石垣であった可能性が高い。

切岸 SW020103 石垣 SW020102 の上方、曲輪 SX020104 までの斜面。石垣 SW020102 の検出状況からこの範囲には石垣が築かれなかったと考えられる。検出状況も一部、造成のために土を張り付けた部分（図3の⑧層）もあるが、基本的には地山層の明黄灰色粘質土（図3の⑩層）および黄灰色岩盤層（図3の⑪層）を削り出して造成した斜面とみられる。斜面の角度は 30～35°。高低差は約 5m。

曲輪 SX020104 石垣 SW020101 と切岸 SW020103 の間にある平坦面。大手道（図1のe）に隣接しているため、大手道を防御する檜台としての役割を担ったと考えられる。

平坦面の規模は、現況地形において平坦面先端部で幅約 15m、斜面裾部で幅約 18m、奥行約 6mを測る。石垣 SW020101 の検出状況から崩落した石が曲輪 SX020104 の上面に堆積していることが判明しており、本来の曲輪は斜面のさらに奥まで続くとみられる。石垣 SW020101 の崩落石が大量に堆積しているため、断面観察においても曲輪 SX020104 の奥行は確定できていない。

曲輪の先端部は、切岸 SW020103 の上に盛土をしている状況（図3の⑥層）が確認でき、平坦



写真9 石垣 SW020102 と切岸 SW020103



写真10 曲輪 SX020104 検出状況

面を延ばすように造成したと考えられる。なお、曲輪面において構造物などの遺構を確認することはできなかった。曲輪の造成土（図3の⑤層）がごく薄く、すぐに地山の岩盤が露出する状況であることから、後世の削平や土砂の流出によって遺構が確認できないものと考えられる。

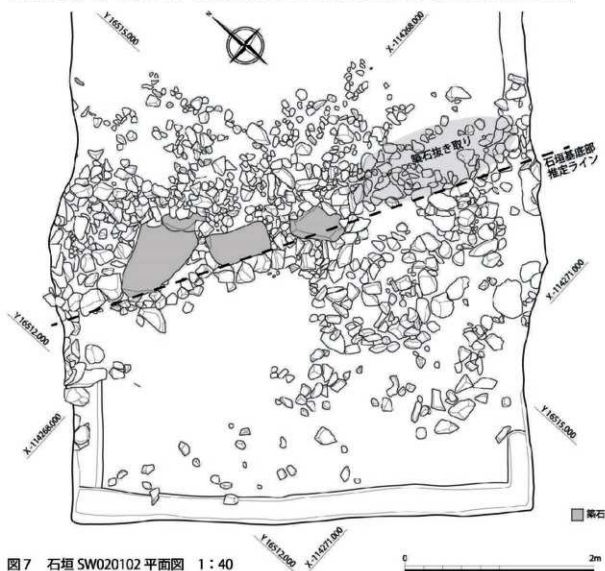


図7 石垣 SW020102 平面図 1:40

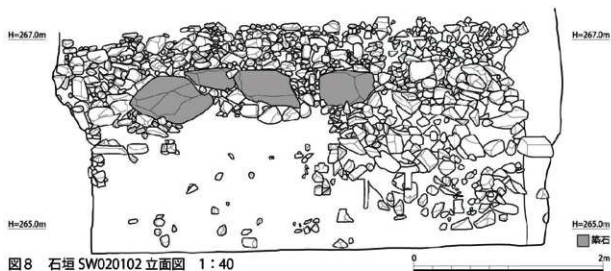


図8 石垣 SW020102 立面図 1:40

## 第4章 遺物

第2次調査の出土遺物の大半は瓦類で、土器類はごく少数であった。小面積の調査であったが、瓦類だけで整理用コンテナ約80箱分が出土した。そのほとんどが丸瓦・平瓦であり、現段階では整理調査が十分に行えていないため、本報告書では軒瓦を中心に報告することとする。

なお、出土した瓦の多くが上段部の石垣SW020101周辺から出土しており、曲輪1にあった瓦葺建物に伴うものと推測される。

図9-1は、左巻三巴文軒丸瓦。3点出土。珠文が18個の軒丸瓦である。第1次調査でも出土し、過去に採集された軒丸瓦で最も多い。

図9-2は、大溝城と同范の軒丸瓦。6点出土。胎土が精良で、焼成も良い。外縁の内面にもヘラケズリ調整を施し、非常に丁寧に仕上げる傾向が強い。採集品はこれまでもあったが、発掘調査では初の出土。

図9-3は、左巻三巴文軒丸瓦。2点出土。珠文が大きく、間隔が密である。1/4程度の破片であるため、全体像が把握しにくい。同范品が採集されている(小谷2013)。それによれば、巴の頭部が大きく、珠文の個数は23である。

図9-4は、中心飾りが菊花文の軒平瓦。1点出土。中心部分の破片であるため、文様の全体像はわからないが、内区文様の上下に界線が伴う。文様構成からみて、水口岡山城の時期よりも遡る可能性があり、寺院から転用された瓦と推測される。

図9-5は、中心飾りが桔梗文をモチーフとした軒平瓦。3点出土。中心飾りの左右に小さな支葉を伴った唐草が1回反転する。文様は内部が凹んだ独特な表現となっている。

### 【参考文献】

小谷徳彦 2013 「伝水口岡山城跡出土瓦」『淡海文化財論叢』第5輯 淡海文化財論叢刊行会

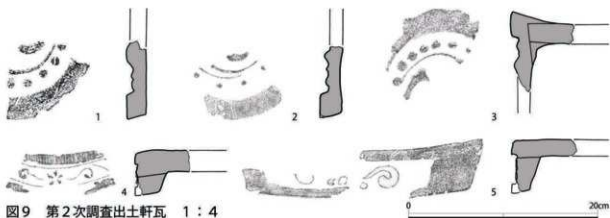


図9 第2次調査出土軒瓦 1:4

## 第5章 まとめ

第2次調査の調査成果をまとめると、次のようになる。

### ①曲輪Ⅰ（主郭部）南側斜面は2段構造であった。

調査区の上段部にて石垣 SW020101、調査区の下段部にて石垣 SW020102 を検出し、斜面中間地点において曲輪 SX020104 を確認した。このことから、曲輪Ⅰの南側は上段と下段の2段構造であったことが判明した（図11）。地形測量調査（地形測量図は図12）で曲輪Ⅰの南側斜面のうち、第2次調査の対象地周辺では斜面の中間あたりに平坦面が存在していることが分かっていたが、発掘調査の実施によって平坦面が曲輪 SX020104 であることが確定でき、曲輪 SX020104 を境に上段部と下段部に区分できることが明らかとなった。

### ②上段の石垣 SW020101 は高石垣であったと推定できるようになった。

石垣 SW020101 は崩れた状況であったため、石垣の基底部を確認できなかった。しかし、曲輪 SX020104 に散乱する築石の状況から考えて、石垣 SW020101 は高石垣であったと推測される。地形測量の結果から、曲輪 SX020104 と主郭部である曲輪Ⅰ上面との高低差は約8mであることが読み取れる。このことから考えて、石垣 SW020101 はおよそ8～9mの高石垣であったと想定できる。

### ③下段部は腰巻石垣と切岸の組み合わせで形成されていた。

石垣 SW020102 は、検出状況からみて、高石垣ではなく高さ2m程度の低い石垣であり、虎口gが存在する帯曲輪面から立ち上がる腰巻石垣であったことが明らかとなった。また、石垣 SW020102 の上部は、曲輪 SX020104 まで切岸 SW020103 であった。つまり、下段部については、腰巻石垣と切岸によって造成されていたのである。

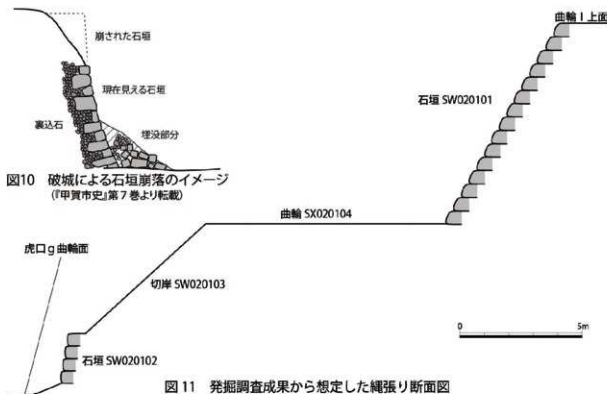






図 12 地形測量図(都市計画図に合成) 1:3,000





なお、今後の調査の成果に委ねる部分も大きいですが、曲輪Ⅰ南側斜面の下部には高石垣を構築しなかった可能性が高く、城の中枢部周辺と枳形虎口などの防衛上、重要となる箇所集中的に石垣を使って築城した可能性がある。

#### ④石垣の石材が判明した。

これまで石垣の石材については花崗岩であることは分かっていたが、第2次調査で出土した石垣 SW020101 の崩落した築石および裏込石を検討した結果、築石の石材には花崗岩、董青石ホルンフェルスが使われており、裏込石には築石と同じ石材のほかに泥岩、チャート、緑色岩も用いられていた<sup>(1)</sup>。また、石材の産地については、董青石ホルンフェルスは甲賀市周辺では水口岡山城の立地する古城山でのみ産出し、花崗岩とチャートは鈴鹿山系から信楽山地にかけたエリアで産出するものと推測される<sup>(2)</sup>。そのほか、緑色岩は角の丸い川原石ばかりであるため、野洲川から採取されたものとみられ、泥岩は古城山の地山（岩盤）が泥岩系であることから考えて、現地調達と推定される。

これらの石材のうち、花崗岩の採石場について、古城山内（水口岡山城内）の可能性もある。南側山腹から山麓部にかけて花崗岩の岩盤が露出する箇所が確認でき、図12に示した箇所では岩盤が方形に窪んでいる。岩盤表面の風化が著しく、矢穴痕などは確認できないが、人為的に採石した痕跡である可能性が高い<sup>(3)</sup>。したがって、花崗岩についても現地調達の可能性がある。

第2次調査の成果によって、曲輪Ⅰの構造が明らかになってきた。次年度以降、曲輪Ⅰの内部の調査を実施する計画であり、水口岡山城の全体像がさらに解明されると期待が持てる。

#### 脚注

- (1) 石材の鑑定は、甲賀市みなくち子どもの森自然館の学芸員である小西省吾氏の協力を得た。
- (2) 石材の産地については、小西氏のご教示による。花崗岩の産地については、ピンポイントでの特定は困難であると指摘された。
- (3) 当該箇所についても小西氏に現地確認を行っていただいたが、表面の風化が激しく、石垣の石材と一致するかどうか判別できないと指摘された。



写真11 推定石切場周辺



写真12 推定石切場 岩盤露出状況

# 報告書抄録

ふりがな	へいせいじにじゅうごねんど しんないせきはつかつようさほうこくしょ
書名	平成26年度 市内遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	甲賀市文化財報告書
シリーズ番号	第24集
編者名	小谷徳彦 渡部圭一郎
編集機関	甲賀市教育委員会
所在地	滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
発行年月日	平成27年(2015年)3月20日

所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
水口城遺跡	甲賀市水口町本丸	25209	363-113	34° 58' 9.6"	136° 9' 55.5"	9.0	2013.06.18	個人住宅
水口城遺跡	甲賀市水口町城内	25209	363-113	34° 58' 9.6"	136° 9' 55.5"	9.0	2013.08.09	個人住宅
下浦遺跡	甲賀市甲南町野田	25209	363-114	34° 92' 76.7"	136° 16' 84.1"	4.0	2013.5.29	個人住宅
北脇遺跡	甲賀市水口町北脇	25209	363-033	34° 98' 31.8"	136° 14' 88.3"	425.0	2013.7.24~ 2013.7.26	店舗
信楽町牧地先	甲賀市信楽町牧	25209		34° 91' 46.2"	136° 07' 75.8"	100.0	2013.06.17	その他開発 (駐車場)
古御殿遺跡	甲賀市水口町鹿深	25209	363-105	34° 96' 81.1"	136° 17' 14.3"	128.0	2013.7.3~ 2013.7.8	範囲確認
古御殿遺跡	甲賀市水口町鹿深	25209	363-105	34° 96' 81.1"	136° 17' 14.3"	96.0	2014.03.19	宅地造成
西林口遺跡	甲賀市水口町西林口	25209	363-101	34° 97' 61.3"	136° 16' 13.8"	150.0	2013.7.30~ 2013.8.1	宅地造成
西林口遺跡	甲賀市水口町西林口	25209	363-101	34° 97' 61.3"	136° 16' 13.8"	22.0	2013.12.20	集合住宅
水口岡山城遺跡	甲賀市水口町水口	25209	363-087	34° 58' 12.8"	136° 10' 50.2"	72.0	2013.8.19~ 2013.8.20	その他建物 (老人保健施設)
水口町神明地先	甲賀市水口町神明	25209		34° 96' 77.9"	136° 17' 54.8"	78.0	2013.9.9~ 2013.9.10	集合住宅
窯ヶ谷遺跡近接地	甲賀市信楽町長野	25209		34° 88' 20.8"	136° 04' 71.1"		2013.9.19~ 2013.9.20	その他開発 (太陽光発電)
今郷シゲ遺跡 太田和遺跡	甲賀市水口町今郷	363-108 363-082		34° 96' 97.6"	136° 21' 44.6"		2013.9.25~ 2013.10.8	その他開発 (太陽光発電)
前野遺跡近接地	甲賀市甲南町杉谷	25209		34° 93' 11.9"	136° 15' 98.7"	90.0	2014.02.21	宅地造成
五位ノ木遺跡	甲賀市信楽町神山	25209	367-019	34° 86' 81.8"	136° 09' 92.7"	55.0	2014.3.12~ 2014.3.14	その他開発 (太陽光発電)
水口岡山城遺跡	甲賀市水口町水口	25209	363-087	34° 58' 12.8"	136° 10' 50.2"	105.0	2014.9.11~ 2015.3.27	遺構確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水口城遺跡	城跡	近世			
下浦遺跡	集落	中世			
北脇遺跡	集落	古代	自然流路	須恵器	
信楽町牧地先		近世	溝、土坑	信楽焼擂鉢	
古御殿遺跡	城跡	近世	土坑、ピット	瓦、信楽焼擂鉢	
西林口遺跡	集落	古代~中世	溝、土坑、ピット	土師器、緑釉陶器、信楽焼擂鉢	
水口岡山城遺跡	城跡	室町			
水口町神明地先		中世~近世	池伏遺構、溝	信楽焼	
窯ヶ谷遺跡近接地	窯跡	中世	窯体、灰原	信楽焼	
今郷シゲ遺跡 太田和窯跡	窯跡	古代	窯体、灰原、煙道	須恵器	
前野遺跡近接地		古代~中世	溝、土坑、ピット	須恵器、瓦器	
五位ノ木遺跡	窯跡	中世	窯体、灰原	信楽焼	
水口岡山城遺跡	城跡	室町	石垣・切岸	瓦、灰粘陶器、土師器	

甲賀市文化財報告書第24集  
平成26年度 市内遺跡発掘調査報告書

印刷・発行 2015年3月23日  
編集・発行 甲賀市教育委員会  
滋賀県甲賀市甲南町野田810番地  
TEL 0748-86-8026  
FAX 0748-86-8216  
印刷 近江印刷株式会社